

## 彦根城築城400年 美しき城の時は流れて

今年、彦根城天守閣が慶長12年(1607)頃に完成したとされることから、築城400年を迎えます。この機会に彦根城と町の歴史を、図書館の資料をひもときながらたどってみましょう。

### 彦根城の築城

彦根城の築城は、関ヶ原の合戦で功績を認められた井伊直政が、慶長5年(1600)家康から、石田三成の居城であった佐和山城主に任ぜられたことから、始まります。初代藩主である直政は、『天下取りの知恵袋井伊直政』(池内昭一著 叢文社 1995年)にあるように、武勇に優れ「赤鬼」として恐れられた、「徳川四天王」の一人として幕府創設のため働いた功労者でした。

その直政は、荒廃した城を佐和山の西、磯山に移すことを計画しましたが、慶長7年(1602)、戦傷により病没してしまいます。その子直継の代になって彦根山に計画を変更し、家康から許



札幌雪祭りの彦根城雪像 2007

提供 北海道立図書館

可を得て、慶長8年(1603)頃から築城が開始されることとなりました。

かつてより諸国見張りの要衝とされたこの地で移築を急いだ理由は、三成や秀吉の面影を消し去ると同時に、湖上の防衛を強化するためであり、新城には、旧豊臣勢力の影響が強い畿内西国に対する防備と、京都守護という重大な任務があったと言われていています(『彦根市史 上冊』彦根市役所編刊 1960年 ほか)。

2面につづく

## INDEX

- ・(特集)彦根城築城400年 美しき城の時は流れて～・・・1・2・3面
- ・湖国の本棚・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4面
- ・郷土資料紹介・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4面

## 図書館の催し

### おはなし会

2月21日(水)・3月23日(金)

午前11時と午後3時の2回

1階 談話室にて

### 「湖国の医家」展

3月6日(火)～3月18日(日)

1階 談話室にて

記念講演会 海原亮氏(住友史料館)

日時：3月10日(土)

午後2時～4時(開場：1時30分)

開場：滋賀県立図書館 大会議室



『初夏の彦根城』西山英雄画 芸艸堂 1959年  
(滋賀県立図書館所蔵)

## 名城・彦根城

築城工事は、幕府から3名の奉行が派遣され、周辺7国大名12名の指揮のもと行われました。

彦根城のシンボルでもある天守閣は、通柱を通さない3階建ての構造で、築城を急ぐため大津城の天守閣を移築して作られたとされています。わずか三重の屋根に調和を見せて幾重に施された破風や、二階三階の白壁に映える花頭窓により、美しく威風ある姿を極める天守は、名城として後世に名をとどめる所以となりました。その他、長浜城の大手門を移築した他に類をみない凹字型の城門「天秤櫓」、中国の瀟湘八景にちなんで作庭されたとされる庭園「玄宮園」などが次々と建造されました。

今も御殿や庭園、馬屋までもが現存していることは、特筆に値し、これら城の全容は、『彦根城』(学習研究社 1995年)で、あらゆる角度からの写真や多数の図表、丁寧な解説で知ることが出来ます。

三十五万石の彦根藩主として、譜代大名筆頭の格式を誇った井伊家には、大名美術とも言える文化の世界が開きました。収集された武具、茶道具、能楽衣装などの多くの名品を『近世大名の美と心』(難波田徹編 芸艸堂 1992年)、『井伊家伝来の名宝』(増補改訂版 彦根城博物館編刊 1993年)で鑑賞してみたいかがでしょうか。

## 城下町の出現

城づくりと並行して、上級家臣が城の近くに住み、中級家臣と町屋敷が上級家臣の外側に、さらにその周りに町屋敷や下級武士の屋敷を建てて、地域的な構成がはっきりした新しい城下町が造られました。また町人は職種別に居住し、魚屋町、大工町、鍛冶屋町、伝馬町などの町名

が付けられていました(『近江の城下町』助野健太郎・小和田哲男著 桜楓社 1971年ほか)。

『彦根の歴史』(彦根城博物館編 彦根市教育委員会 1991年)では、元禄8年(1695)には、町方だけで53の町があり、町人15371人、寺社方741人が住み、武士は約2万人住んでいたと推定されています。

当時の暮らしは、『彦根の食文化』(彦根城博物館編刊 2005年)から見てとれます。

城下町には様々な店があり、食料品や日用品は、伝馬町や川原町で買い物をしたようです。川原町は、現在も買い物客で賑わう銀座商店街に当たります。今に伝わる特産品の「松原えび」や「小泉紅かぶら」など、琵琶湖や、周辺の豊かな自然から多くの恩恵を受けていました。



「犬上郡彦根市街全図」『近江国各郡町村絵図』  
(滋賀県立図書館所蔵)

## 存亡の危機を越えて

明治4年(1871)、廃藩置県により彦根藩は消滅し、廃城令が出されて、膳所城や水口城に続き彦根城も、解体が決定していました。作業が始まろうとしていた時、明治天皇の北陸巡幸に随行して、京都への帰途にあった参議・大隈重信が、彦根城を目にしてその消失を惜しみ、天皇に保存を奏上したことが功を奏し、危うく彦根城は廃城を免れたのでした(『彦根市史 下冊』ほか)。「明治十一年十月十四日、舊(旧)彦根城郭保存、仰出さる。」として、『明治天皇聖蹟誌』(滋賀縣編刊 1941年)では、その時の文書が5通、確認できます。

存亡の危機は、再び昭和の大戦によって、もたらされます。『日本の空襲 第6巻』(同編集委員会編 三省堂 1980年)「滋賀の空襲」の中で、記録に上がった主な空襲10回のうち、

被害の大半は彦根市に集中したとされています。

爆撃を免れた彦根城は、日本の史跡として再認識されて、昭和 27 年 3 月 29 日、天守閣は、国宝の指定を受けることとなりました。

天守閣は、宝永元年（1704）に大修理を行なった他、幾度となく小修理が繰り返されましたが、昭和 32 年から 35 年にかけて行われた修理の概要を報告した『国宝彦根城天守』（彦根市役所編刊 1960 年）では、解体中の天守閣の内部の写真など、外側からは知りえない資料が多数見受けられます。

### 彦根城ブームと町並み保存

テレビ放送が普及し始めた昭和 38 年、第一作目の NHK 大河ドラマとして第 15 代藩主の井伊直弼の生涯を描いた、舟橋聖一の作品『花の生涯』（新潮社ほか）が選ばれました。放送が始まると、舞台となった彦根城への関心が高まり、全国から人々が集まる一大ブームを引き起こしました。

このドラマで一躍有名になった現存する藩の公館「埋木舎」で直弼が 14 男坊として不遇の日々を過ごした時代の様子は、『埋木舎 - 井伊直弼の青春』（改訂版 大久保治男著 高文堂出版社 1991 年）で詳しく知ることが出来ます。

直弼は、『井伊大老』（吉川英治著 学陽書房ほか）など多くの作家に描かれており、近年では、小説『藍色のベンチャー 上・下巻』（幸

田真音著 新潮社 2003 年）に、湖東焼を巡り、幕末の世に翻弄されてゆく主人公に大きな影響を与える人物としても登場しています。

彦根の町の様子に目を向けてみると、明治維新による一時的な衰退はありましたが、湖東の中心都市として活気を取り戻し、戦後の昭和 24 年には「彦根観光博覧会」が開催されました。記録集『彦根観光博覧会』（長坂寛二編 滋賀新聞彦根支社 1949 年）は、当時の人々や町の様子を垣間見られる貴重な資料です。

時代のすう勢の中で、城下町彦根の面影が薄れゆく状況が危惧されるようになり、昭和 49 年に市民団体「城下町彦根を考える会」が発足しました。その後、伝統的建造物群保存地区に指定された「旧下魚屋町・職人町・上魚屋町」の通りや町屋の変遷の写真や絵図も豊富で興味深い、保存対策調査研究書『彦根の町並』（彦根市教育委員会刊 1976 年）が刊行され、町並み保存の活動が始まりました。

昭和 63 年には彦根市において本町地区の町並みづくりに関する条例が制定され、彦根城から京橋にかけて江戸の町並みを再現した「夢京橋キャッスルロード」が誕生し、現在も多くの人が訪れ、江戸時代の風情を楽しんでいます。

築城から 400 年を経て、気高く美しく変わらぬ姿を見せる彦根城、今も城下町の面影を残す懐かしい町並みは、人々を魅了し続けています。

## 今月の ブックマーク



### 彦根りんご”をご存知ですか

今では、知られなくなってしまいましたが、江戸時代末期から明治・大正頃には、りんごが彦根の名産に数えられていました。

大老に就いていた藩主井伊直幸が、江戸時代中期にはすでに栽培されていたりんごを、将軍に献上したこともあるようです。

そのりんごは小粒な「ワリンゴ」という品種で、真夏に収穫されていたそうです。

このことを知ったのは「彦根城博物館だより」72(同館発行・不定期刊)のコラム『金亀玉鶴 研究余録』からです。この博物館だよりでは、テーマ展などの最新情報も紹介しており、彦根城を知って楽しむための手がかりになるのではと思われます。当館の参考資料室でご覧いただけます。

ちなみに、りんごの栽培は昭和初期までは城下周辺でされていたもののその後断絶してしまいましたが、現在、新たにワリンゴを彦根の特産にしようという活動が起きているそうです。私たちが、味わえる日も近いのでは。

## 「湖国の医家」展開催

当館1階談話室で、3月6日(火)から3月18日(日)まで「湖国の医家～彦根藩医河村家旧蔵書展」を開催します。

幕末から明治初期にかけて彦根藩医を勤めた河村純碩・純達が所蔵していた医学書の一部や、参勤交代随行時に使用したとされる薬箱などを展示します。



会期中の3月10日(土)には、記念講演会も開催されます。

当時のお医者さんが、どのような本や器具を使用されていたのかを、垣間見ることのできる大変貴重な機会です。

主催：滋賀医科大学附属図書館

共催：滋賀県立図書館

問い合わせ先：滋賀医科大学附属図書館

:077-548-2080

## FLASH ふらっシュ

滋賀県産業支援プラザで  
県立図書館のご利用を案内しています！



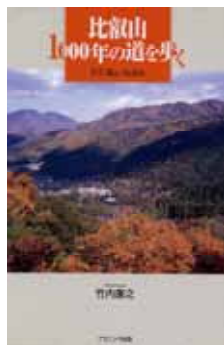
びわ湖ホール前の産業支援プラザをご利用になる方々にも、県立図書館のオンライン・データベースなどの資料をご活用いただきたいと、情報資料コーナー（1階）に上記の写真にある紹介の掲示をさせていただきました。これを見てのお問い合わせが増えていきます。

## 今月のデジタルアルバム帖



### 2月「湖辺の村々」

琵琶湖は滋賀県の6分1の面積を誇り、かつて人々が「海（うみ）」と呼んでいました。2月は明治期の絵図や写真・文献を通して、そんな母なる琵琶畔の人々の暮らしをテーマ別に紹介します。



## 湖国の本棚

『比叡山 1000年の道を歩く』

竹内康之著

ナカニシヤ出版

2006.11

比叡山は、信仰の地として広く知られていますので登山の対象とはなかなかとらえにくいのではないのでしょうか。この本では、東山を含む比叡山系のさまざまなルートを紹介しながら、山登りのフィールドとしての魅力を引きだそうと試んでいます。登山コースも家族連れで楽しめる一般向きコースから登山技術の必要な上級者向けまで用意されており、目印や見所など写真を数多く取り入れて丁寧に説明されています。古道と峠道については、参詣道・修験の道、街道など改めて取り上げられ、こちらも写真入りで分かり易くなっています。

春になれば、本書を片手に比叡山に出かけてみませんか。

近江国犬上郡三津屋村 [耕地絵図]

(滋賀県立図書館所蔵)

### 3月「江戸時代の集落と民家」

江戸時代から明治の暮らしを再現するために、当時の村のたたずまいや、民家の様子を絵図類などから紹介していく予定です。

## 郷土資料紹介

読書日記 2 明治の小説  
読書日記 3 大正の小説  
前川文夫著刊 2006年  
ぶらり近江の観音めぐり  
藤森武写真 玉城妙子著 小学館 2006年  
仏像 特別展 一木にこめられた祈り  
東京国立博物館, 読売新聞東京本社文化事業  
部編 読売新聞社 2006年  
親鸞の仏・浄土 その科学との間  
中村介英(武三)著 中村商家保存館 2006年  
大津事件の謎に迫る 消えた「児島大審院長  
意見書」の行方  
大場義之著 文藝春秋企画出版部 2006年  
蒲生氏郷と家臣団 文武両道、秀吉に次ぐ未  
完の天下人  
横山高治著 歴研 2006年  
近江の山城ベスト50を歩く  
中井均編 サンライズ出版 2006年  
戦国から近世の城下町 石寺・安土・八幡  
滋賀県安土城郭調査研究所編  
サンライズ出版 2006年  
近江城郭探訪 合戦の舞台を歩く  
滋賀県教育委員会編 滋賀県文化財保護協会  
2006年

## 平成18年11月～12月購入・寄贈分

地域政治文化論序説 滋賀県の政治風土研究  
大橋松行著 サンライズ出版 2006年  
住民監査請求ってなに? 清水に魚棲まず、  
と言うが公金は正しく遣うべし  
前川文夫著刊 2006年  
菜園家族物語 子どもに伝える未来への夢  
小貫雅男, 伊藤恵子著 日本経済評論社  
2006年  
近江商人ものしり帖 ビジネス成功の源泉  
「始末してきばる」「もったいない」「世間  
さま」のころ  
淵上清二著 三方よし研究所 2006年  
豪商たちの時代 徳川三百年は「あきんど」  
が創った  
脇本祐一著 日本経済新聞社 2006年  
近江富士まんだら さんさん会&八田正文  
写真集 2000～2006  
八田正文編著 サンライズ出版 2006年  
百歳の歌謡面白話 大津絵と歌謡曲  
渡邊三省著 パロル舎 2006年  
志摩のさざ波 短編小説集  
前川文夫著刊 2006年  
九のうた 日・英語作品集  
宇野喜伸著 三友社出版 2006年